

* 関東学院大学

叔母とUFOキャッチャー

植松成美

わたしの叔母は毎日ゲームセンターに通い、一日中UFOキャッチャーに明け暮れた。自分の手で獲得したぬいぐるみを眺めるのが、唯一の趣味だった。くまやうさぎのよく知らないキャラクターのぬいぐるみチャームを集めては、海に見えるベッド横の窓際に並べる行為は、叔母にとって儀式のようなものだった。誰もがかわいいと思うようなキャラクターではなく、原色やネオンカラーの毒々しい色のぬいぐるみが、枕元までずらりと居座っていた。

隣町に大型ショッピングセンターができてから、叔母はUFOキャッチャーを目当てに毎日軽トラを走らせた。山を2つ超えなければならず、片道2時間はかった。ダブって獲得してしまったぬいぐるみは、盆でも正月でもない平日の夕方にくらりとうちに来て、当時鍵っ子だったわたしにくれた。

私が小学校から帰ってきてランドセルを下ろす頃にチャイムが鳴ると、決まって玄関に立っているのは叔母だった。実の姉妹であるはずなのに、叔母と母は仲が悪く、顔を合わせないようなので、大体家には上がらずに、顔とぬいぐるみのチャームを持った腕だけを扉から見せ、私が受け取るとニヤリと口角を上げて去っていった。

2階の窓に映る海は、今日も変わらない。漁師の夫はいつ帰ってくるかわからないので、いつでも迎えられるように、叔母は基本的には家にいなければならなかった。新婚当初は望遠鏡で夫の船が見えなくなるまで見送っていた。

叔母の髪の毛は赤い。中学生の頃、初恋の先輩に褒められてからずっと、当時と同じ市販のヘアカラーを使っている。一時は廃盤の噂が出たことをネットで知り、その時は真面目に焦っていた。髪の毛だけは中途半端になるのが許せないため、月に一回は根本を染めている。

叔母の住む村は3年前、隣町と統合された。名前上は「市」に変わったが、実際統合されてからの方がよっぽど村っぽくなったと叔母は思う。自分より年上ば

かりが住んでいる村で、叔母に子どもが出来ないのは叔母のせいだということになっていた。それでも叔母はひとり広い厨房に立ち、夫が獲ってきた大小の魚を捌き続けた。

盆は夫の親戚の墓の清掃を任されていた。何度も法事の手続きをこなしてきて、作業はお手のものだった。私もこの墓に入るのだろうと叔母はなんとなく思っていたが、よく考えると身内では誰もこの作業を引き継いでくれる人はいないのだった。

ある日、叔母はダブルベッドの中で自分が西枕で寝ていたことにふと気がついた。初めてこの家に入った時に窓から見えた、海を反射する光などを思い出して、ひとりで憂鬱な気分になった。

叔母はわたしをゲームセンターに連れていってくれたことがある。母に禁止されていたため、入ったのはその一度だけだ。自動ドアが開く瞬間は、まるで未来でも過去でもない怪物に呑み込まれていくようだった。ガラスケースの中に隔離されたメダルや白い宝石たちは、現実の誰の汗や笑顔より輝いていると思った。鼓膜が破れるほどキラキラした音が、いつもの身体の嫌な部分をかき消してくれる気がした。

「宝箱の中にいるみたいだろう。普段叶えられないことが、ここではできる。自分次第で、欲しいものが手に入る。こっちのもんさ。」

興奮してニヤリと口角を上げる叔母の瞳は、近くで見ると少し青みがかかり、澄んでいて綺麗だった。そんなふうに、その日は一晩中ゲームセンターの中で、叔母と「宝探し」の冒険をしていた。

夜が沈んだような朝、叔母が運転する車の中で、自分で獲ったチャームたちを眺めていた。魔法が解けたって、自分で獲ったマスコットたちだった。その後脳が溶けるほどの睡魔が襲い、タバコの匂いが漂う車内でわたしはようやく眠りについた。

ネオン色のマスコットたちが、スクールバックに吊る下がっている。無限にあると思っていた可能性を捨てる時期が近づき、教室は静かにざわついていた。塾に

寄ってから帰ると言う友達を置いて帰る。通学路にある手芸用品専門店で初めて入り、ある中で一番かわいく小さなハサミを買った。まずは赤いうさぎの腹を切り裂き、わたを丁寧に取り出したあと、いつも使っている筆箱の中にそっと敷き詰めた。

キスくらいしてみたかった

藤原愛実

学校行きの各駅停車

昼過ぎ晴れた夏の車内が心地いい

青い空に浮かぶドーナツ

切ない景色に甘い匂い

そいえば私たちまだキスをしていなかった

絡めた指 暖かい眼差し

夢から覚めた昼間のよう

こんなに近くにいたのに

私たちまだキスをしていなかった

いつか私を好きな君にまた会えたら

照れるようなキスをしよう

モテたい

舟山海斗

僕は、女の子にモテたい。

彼女が欲しくてたまらない。

彼女ができたなら、死んでもいい。

何をするにも、女の子のことばかり。

女の子って、何考えて生きてんだろう。

童貞の僕に、そんなことわからない。

僕は、とても寂しい。

人といないと、死んでしまう。

彼女がいたら、この孤独を癒してくれるだろう。

ただ、女の子と喋ってるより、男といった方が楽しい。

むさ苦しいけど、話が合う。

女の子の話って、なんでああもつまらないんだろうか。

モテたいけど、媚びたくはない。

女みたいに、つまんなくなりたいくない。

つまらない人間になるくらいなら、彼女なんていらない。

でも、そうやって意地を張ってるのも、面白くない。

女とうまくやってる方が、楽しいんだと思う。

かっこいい男になりたい。

意地を張ってても、モテない。

媚びを売りすぎても、モテない。

もう、諦めるしかない。

と、思っていたら、モテるかも。

人生、女だけじゃない。

男と酒を飲んでも楽しい。

生きてることに感謝して。

友達と酒を飲んで。

女の愚痴を吐いて。

モテなくてもいい。

光の果て

真夏あむ

おっせえよここまで来るまで、待ってたよって泣きながら笑うぼくのこときぐるいだとか言って突き放さないあなたが好きで。

待ってたんだよ、ここで、ずうっと。

雨の中のバス停、いるはずのない幻が呆然と立っている。どんぐりがころころと零れる、まるで叶わなかった夢のように。

おっせえよ、ばか、おっせえよばーか、初めて会った時から感じてたんだわ。

わからないやつは死ねばいいマインドでここまでやってきたよ。
秘密にしてくれる？ このこと。

ねえ、今、繋がってる。

気づいて。

きみの鼓動が、ぼくからの「気づいて」のサイン。

ねえ、ずっとここにいた。

そして、これからも。

永遠に続いていく旅の最中で、一瞬でもいい、出逢えてよかった。

掴めないことに落胆しないで、今のこの温度を感じて。

ここを、越そう。

ふたりならできるって手を握った、その力がどんなに弱々しくても。

ここを、越そう。

光のその果てで、そしてまた逢おう。

約束。

今のこと、全部忘れてね。

* 京都芸術大学

ちきゅうこそ

井口友希

ちきゅうこそ

よっぽど宇宙的ではないか
こんなにもたくさん人間が
ひとつの大きな大きな球体にくっついて
自分のことに泣いてみたり
他人のことに泣いてみたり
苦しんで

そう思ったら今度は笑って
みたことのないもの、
正体のわからないようなものに
熱心になって近づこうとして
いろんなことに心を忙しくさせながら
暗闇にういている

ちきゅうこそ人間こそ

膨大な宇宙ではないか

そして、もちろん

私の宇宙はだれにもわからせないのだ

カンゾウ

川口優子

小さい頃、

満開の時に

父親が連れていってくれた

そのことは

もうあまり覚えていないけれど

多分、晴れだったのだろう

潮風とともに仰け反った

今年もまた

巨岩が黄色をまとう

さくら

田中愛里

しわ一つないスーツを着て
ツルツルのパンプスを履く
外に出ると

空はねずみ色で
思わず笑ってしまう

風が吹いて

花びらが舞った

ひらひらと可憐に

きらきらと愛らしく。

音も立てずに地面に落ちた

薄紅色の頬が美しかった

自転車に乗ったおじさんがやってきて

無神経に花びらを轢いた

内臓が飛び出し、薄紅は泥にまみれた

地面にへばりつき、みっともなく笑った

わたしのスーツも

いつかはしわくちゃになって

ツルツルのパンプスも

踏まれて蹴られて

傷だらけになるのだろう

それでも さくらは生きる
涙を隠して
ゆらゆらと笑うのだ

堆積

森菜々子

石と石がぶつかり合う音

擦れて擦れて削れてく

細く鋭く輝きを増す

目に届くまぶしい光に

思わず目が眩んでしまった

蝉の声が聞こえてすぐに

私は空を眺めてみた

天を彩る鮮やかな青を

久しぶりに見れた気がした

早い音楽に急かされ

叫びながら稽古場を走った

鳥の声が耳から体に入って

深く呼吸して泣きそうになった

またねと呟いたあの日々に

私の言葉は届くかな

あそこで生きた人々は

もうあの場にはいないけど

忘れたなんて言わせない

もう掴めないあの日々に

私たちは生きていた

水

八友陽平

水はある

僕にも

君にも

水は何色にでも変わる

生きていく中で混ざっていく

自分の水が何色か

わかる人

わからない人

生きていく中で見つける人

分からないままの人

水は映す

目を奪われる茜空

なぜか落ち着かない曇り空

雲ひとつない澄み切った青空

ふたり帰り道で見上げた不自然なほど明るい秋空

ひとり残され立ち尽くして見上げる雪のちらつく寒空

ひとつとしておなじものはない

水は

人の個性で可能性

いろのなかに

柴田海斗

実際、いくつか映し出された光景のなかでは
あなたの横顔だけが輪郭だった

空中を染めている・それ自体が渡されたもの
とは気づかずに描き分けようとするわたしに
こちらからは見えない色合いがいくつかある
ことを教えてくれた

いくつかの日々たち

1. 反対向きの地下鉄に乗る人もいて、
向かいのホームとの距離を数えた日

2. 冷凍してあったご飯をいつもよりも
20秒だけながくチンした日

3. あなたがくれた飴の包みが資源ゴミ
としての機能を十分に果たした日

4. そのことに、とても満足していた日

それらをたぐり寄せ、たおやかに編んでいる
から、わたしには骨格がある・これは色彩で
わたしは平面の上に立っている

水溶性の淡さがいくつか重なり合っている

傘

河原崎碧依

雨音

僕は耳で聞いている

目蓋が閉じていて

前が見えない

僕の左手が右の腕にふれている

焦燥

乾いたくちびるを

僕はうごかすことができる

ということを考えている

僕の背中のずっとうしろにある

玄関

だれかの忘れ物のように僕の傘がある

茂みのさなか

田中太陽

青い茂みのさなか、

つめたい目玉を隠している、瞼を踏み荒らしていった、
日差しをおれは黙認する。

セミが鳴いていて、

睡眠を返さなければならぬ。

ちつとも凧いでいない茂みは、

カエルの唇が常にふやけているように、燃えている。

男にさっき押し付けられた大量の風船を、

少女はまるごと手放した。

あんた、どこか濡らしたほうがいいぜ。

白い茂みのさなか、

心筋を痺れさせている、ツバメが掠めた火の変容を見る。

塩と砂糖が似ていて、

教室が透き通ってくる、影は等しくまぶしい。

おれは肩が凝っていた、柄にもなく。

冷房がずいぶんおとなしくしている、

遠くで雲が呼吸を忘れる。

黄色い茂みのさなか、

笑いあっているのは、積極的に人を救うタイプの天使だ。

這ってくる痒さは、

夏草を刈り取ったあとの、

小学生になりたがった報いなの、かもしれない。

鎧は着ないほうがいい、

どんなに軽い素材でも、いつでも。

おれは、

泡立つせせらぎをあとにして、脱皮を急いだ、

街の外れはきつと涼しかった。

あんた、

笑ってくれ、できるだけ、

軽やかに。

ゆがみ

開出真央

ちよつとだけ押す

ちよつとだけ曲げる

ちよつとだけ触りたい

ちよつとだけ

死んだ入道雲 訪れる月曜日

明日のつぼみは枯れるのか

花びら散るには遠すぎる

くらましの羽根 くつつき膝とおでこ

くるぶしだけがあたたかい

まがった背骨 君が好き

ひだりに溢れる頬 やがて線は刻む

深くなるまで 見つけていく

深くなるまで 見つめているよ

* 國學院大学

横断歩道

土屋はな

首を切られた夏草の悲鳴が鼻腔を刺す

夏草と夏空と夏信号機

あお の暴力に目を瞑る

前髪を吹き飛ばす地下鉄の熱風

構内アナウンスが

「黄色い線の内側から飛び出せ！」と叫ぶ

前を歩く赤いランドセル

突然振り返ったその視線は汗を反射して
プリズムを生み出していた

我楽多の詰め合わせギフト

田村嶺奈

私は此岸にて狂乱する。水のように飲めるトンボ玉は心地よい炭酸感を持つ。ベビーカーからのお願いは記憶の水槽の底に沈み、埋まってしまった。旅にでも出よっか、エーテルを見つけない。「今から帰ります。」ガラガラしていた血気盛んな二月の兵隊はすっかり心変わりをしてしまったようだ。お口の恋人には美味しくリニユアルした百合の花が大抜擢された。夜の恋は大人になっても憧れのままで瞳には映らない。天空からはラムネの中に入っているビー玉、いや違うエー玉が降り注ぐ。想像をチカラにリングに上がったけれど、レフェリーやドクターからストップがかかってしまった。まったくカチカチなのは頭じゃなくて筋肉だけにしてもらいたい。フェットチーネに茹でた後にキャラメリゼさせたサファイアを食べてみた。旬だったからかすがしく非常に香り高かった。人工衛星の名前は片思いの人にしよう。私から離れていくなんてそっくりじゃないの。悲しくなる前に白菜のおくるみで包んであげよう。私が死んだ暁には人体模型になって中華街を闊歩することを誓います。嗚呼、まるで人間みたいね。

孤独な色の後始末

鈴木優花

最寄りのバス停、朝の光が反射する手元の画面を眺めながら、片耳だけイヤホンをつける。

どうしてこんなにも重たいの。

重いから、愛なのか。

歳をとればとるほど、何をするにも理由をつけるようになっていた。たった数言、自分の感情を口にすることすら躊躇ってしまう。二文字が紡げない。

我儘を言わないで、聞き分けよく、大人しく。大人らしい顔をしていて欲しい。自分の中の、幼い子どもに言い聞かせている。固定観念に呪われて、纏わりついて離れてくれない。

こんな大人になりたかったわけじゃないんだって。

出会った瞬間、頭の中がスパークした。景色がピンクに染まった。私の心を支配した感情を、勢いのまま言葉にしたかった。人生最大レベルの衝撃を隠そうと平静を装って、気色の悪い笑顔を作った。この感情のままに行動したら、何を手に入れて何を失うのか、天秤にかけて、目の前を覆ったのは、すべて現実。

渴望するほどのエネルギーを持ち合わせていなかった。身体を維持することに精一杯で。そうやって理由をつけていないと、気がつけば跡形もなく崩れ落ちてしまいうさだから。刺激を求めている癖に、いざそれが手の届く場所に現れた時、無意識に手のひらを返す。

溺れたいと願うだけ。

例え話が大好きなの。

刈り取った恋の芽に、火をつけた。

赤く燃える、私の情緒を糧に。

労力の要らない願望だけを撒き散らして、燃え殻を踏み潰す。

誰にも救われなかった愛情をゴミ箱に捨てて、私は私に戻ってゆく。軽やかな指先が、興味の無いバンドの曲で埋め尽くされたプレイリストを再生した。

腐った人間と言いたい

小出美桜

牛乳 飲んでいる

毎朝 8 時配給のひどく冷えた紙パック
あんまり好きじゃない

誰の目も濁っていなかった遠い日々
に給食の 200 ㍓ がきつくて

隣の席のあいつにあげた

牧場って名前が付いた牧場系牛乳がうまいんだよって笑った声が
今でも耳にそのまんま

ストローを意味もなく味わう

牛乳って足早いんだろうか

きつと腐ったら見た目が少しおかしくても

一応牛乳だ 腐った牛乳

なのに人間は

人間は腐ったら人間じゃないらしい

ゾンビって、いうらしい

曖昧でいることが許されない

色ばかり真っ直ぐに白い液体と違って

牛乳 飲んでいる

なかなか飲みきらなくて
もうぬるくなった

憧憬、あなたの

神宮詩織

幼い子どもをカーテンの裏に隠してしまった。

繭を紡ぐ、愚かなこの子のために

余地に託すしかないのだろうか。

柔らかな朗読に罰を与えたくて

青空に一点残された雲を虐めている。

アヒルの子は一輪の薔薇にはなれない。

眼球に薄いレエスを重ね、夢。

あなたの地獄はどこですか。

沈黙に幾千万の可能性を見出して

ヴァーチャルな敵意に脳みそを焼かれている。

そっと肩を抱かれ、ぬるまっただくなる。

一時の煌めきは、羽化の不可逆性を信仰し

シャボン玉の私に恥をかかせた。

悪戯な無知は雷鳴と成り果て

ストレッチャーの上の身体を突き刺している。

ぎゅっ、私はここにいるね。

誰もいない、息ができない、浮き漂う

だから宙の星は手を繋いだのね。

他人宛のラブレターが嬉々と囁いて

未承認の一生を恣意的相互依存で騙している。

ちいさな部屋で

涙の穴にお花の刺繍をして愛でようか。

夜の端っこにホイップを絞って食べようか。

瘡蓋の痕にジムノペディを聴かせようか。

ね。